

藤田 智 **直伝!** プランター菜園

基本の キホン!

恵泉女学園大学 園芸文化研究所准教授
藤田 智



秋田県生まれ。恵泉女学園大学園芸文化研究所准教授。専門は野菜園芸学、植物育種学、農業教育学。「NHK 趣味の園芸」講師、雑誌「やさしい畑」連載などで野菜作りの魅力を伝える。著書に「別冊 NHK 趣味の園芸・わが家の片隅でおいしい野菜を作る」(NHK 出版) など多数。

その20 タマネギ

一さっと水にさらしてサラダで!

タマネギは4000年以上も前から、中央アジアなどで栽培されてきました。日本への導入は明治初期ですが、消費が伸びたのは戦後になってからです。今では血液サラサラ効果で生食も人気となりました。

タマネギ栽培で大切なのは、苗をちょうどよい大きさに作ること。細すぎたり太すぎたりすると、よい玉が取れません。うまく育苗して、来年の春には新鮮なサラダを食べてみませんか?



最近では生食も積極的にされるようになってきたタマネギ。

タマネギの特徴

タマネギの原産地については諸説ありますが、私は、アフガニスタン近辺の中央アジアとする説を支持しています。栽培の歴史は古く、4000年を越えるものとされ、北イランからエジプトではかなり古い時代から食用として珍重されていました。

日本へ本格的に導入されたのは明治4年(1871年)といわれ、北海道や大阪、兵庫で栽培が始まりました。しかし、タマネギを収穫はしたものの、実は、当時の日本人の食生活にほとんどなじみませんでした。明治後年になつて、南半球のニュージーランドなど

タマネギが必要な地域へ、足りない季節に輸出されるといふ珍しい経過をたどった野菜です。

日本における古くからの産地は、前述の北海道、大阪、兵庫でしたが、戦後、食生活の欧米化によってタマネギの消費が伸び、それとともに北海道の栽培面積が急増しました。現在では全国一の産地となっています。

タマネギは、冬越しして育てる野菜の代表です(北海道を除く)。自然状態では、越冬して5月にネギ坊主の花が咲き、6月にタネができます。しかし、ネギ坊主が出てはタマネギ栽培として失敗になるので、花芽分化の条件を知っておく必要があります。

タマネギはある一定以上の大きさになると、寒さに反応して花芽を分化す

主な品種

タマネギには多彩な品種があります。次頁「おすすめめのタマネギあれこれ」も参照してください。

● **極早生種**
トウ立ちが少なく低温肥大性に優れ、

コラム タマネギを切るとなぜ涙が出るの?

タマネギを包丁で切ると涙が出るのは、タマネギに含まれる硫化アリルが揮発して目に刺激を与えるためです。ただし、この成分にはそれだけでなく、いろいろな有効作用もあるといわれます。

例えば、ビタミンB₁と一緒に摂取するとB₁の吸収を高め、利尿・発汗作用を促します。また、血液をサラサラにする効果は有名で、糖尿病、高血圧などの予防に有効だといわれています。ただ辛くて、涙が出るだけではないのです。



レッドオニオンとひじきのサラダ。

病気に強い「マツハ」があります。

● **早生種**

次頁「おすすめめのタマネギあれこれ」を参照してください。

● **中生・中晩生種**

中生では、病気に強く多収の「ダーボ」、作りやすく食味のよい「O・L黄」、分球の心配がない「O・P黄」もおすすめです。

貯蔵性の高い中晩生では、病害に強い「アタック」のほか、「パワー」があります。

● **その他**

生食用には「猩々赤」が彩りよくおすすめです。

おすすめのタマネギあれこれ

極早生種

(4月下旬～5月上旬収穫)



‘チャージ’

1球約350g。作りやすく食味もよいので家庭菜園向き。

早生種

(5月中旬以降収穫)



‘ソニック’

早どりできるトウ立ちしにくい早生種。べと病やポトリチス病などの病害に強く作りやすい。



‘オメガ’

病気に強く揃いもよい中早生種。9月末までのつり玉貯蔵に向いている。

赤タマネギ



‘狸々赤’

オニオンサラダに最適の赤タマネギ。中晩生で6月上旬から収穫する。

中生・晩生種

(6月上旬以降収穫)



‘O・K黄’

1球約290gの中生種。貯蔵力抜群で形と色ツヤがよく、萌芽も遅い。三拍子揃った品種。



‘アトン’

1球約600gと大玉栽培向きで、加工・業務用にも利用されている。食味がよいので家庭菜園で栽培してもおもしろい。

中晩生種



‘ネオアース’

色ツヤがよく貯蔵性に優れる中晩生種。

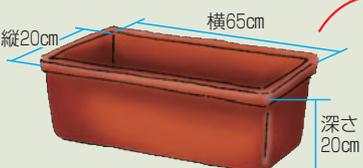
タネまきと育苗

タネまき時期：9月中下旬に行います。早すぎると大苗になってトウ立ちしやすくなり、遅すぎると凍害にあって枯死する危険性があるので、適期を守るようにします。具体的に、早生種は9月上中旬、中生・中晩生種は9月中下旬、晩生種は9月下旬ごろを目安にタネをまくとよいでしょう。

品種：筆者が毎年作っていて、特におすすめなのが早生の‘ソニック’、中生の‘O・K黄’、赤タマネギの‘狸々赤’です。

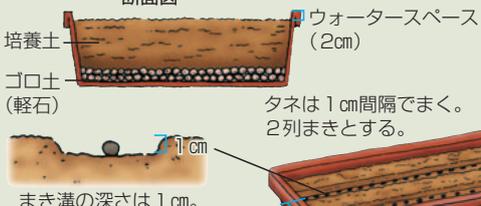
① コンテナの準備・タネまき

コンテナとタネ、培養土、鉢底石を準備する。コンテナは標準の大きさでよい。



培養土を入れる。

断面図



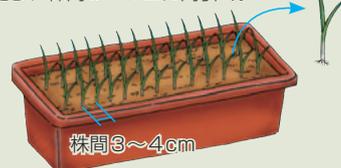
② 水やり

発芽までは土を乾かさないように。



③ 間引き

発芽後草丈7～8cmに生長したら、株間3～4cmに間引く。

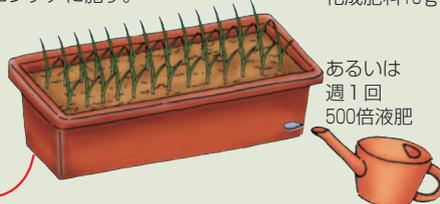


発芽してからは、原則として「乾いたらたっぷり」と。

④ 追肥

2週間に1回、化成肥料10gをコンテナに施す。

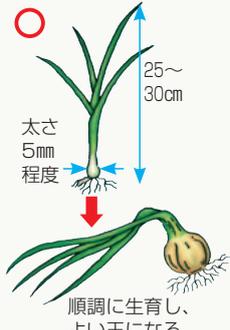
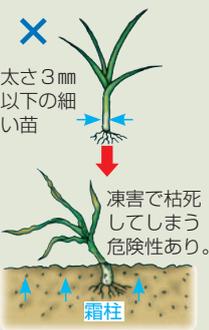
2週間に1回 化成肥料10g



あるいは週1回 500倍液肥

⑤ 理想的な苗

植え付け時の草丈は25～30cm、苗の太さ5mm程度に育てる。育苗期間はおよそ2カ月。



栽培方法

1 コンテナなどの準備

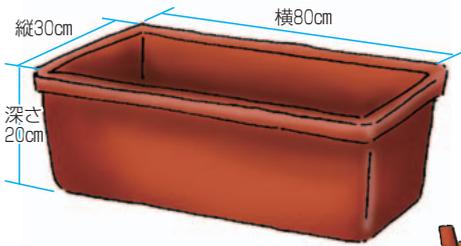
コンテナは、20×65×20cmの標準サイズでもかまいませんが、できれば30×80×20cm程度の中型〜大型のものが理想です。(第1図)。

2 苗の植え付け

早生で11月上中旬、中生・中晩生で

第1図 コンテナなどの準備

① 中型〜大型のコンテナを準備。



② 鉢底ネットを敷き、底が見えない程度にゴロ土(軽石)を入れる。

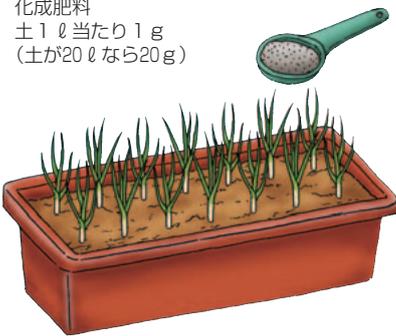


③ 培養土を入れる。



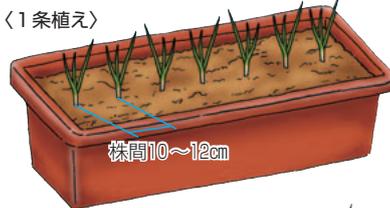
第3図 水やりと追肥

2週間に1回
化成肥料
土1ℓ当たり1g
(土が20ℓなら20g)

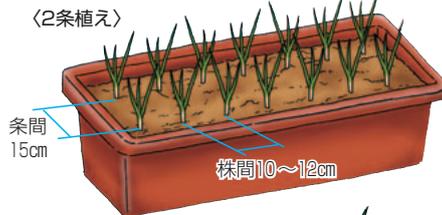


第2図 植え付け

<1条植え>



<2条植え>



無農薬で育てることもできます。虫を見つけたら早めに捕殺しましょう。

4 病害虫

3 水やりと追肥

11月中下旬、晩生種は11月下旬ごろが適期です(第2図)。

水は土の表面が乾いたらたっぷりを与えますが、寒冷期はなるべく暖かい午前中に行います。

追肥は、コンテナ栽培の場合、2週間に1回の割合で行います(第3図)。

第5図 つり玉貯蔵



葉が半乾きくらいになったころ、5~10球ずつひもでしばり、風通しのよい所につるす。

第4図 収穫



莖葉が7~8割倒伏し、なお緑色を残す時期に収穫。

根元を持って引き抜く。

5 収穫

収穫(第4図)した後、屋外で風乾して収納します。早生で5月上旬、中晩生で6月上旬からです。

6 貯蔵する場合

つり玉貯蔵をする場合は、雨の当たらない軒下など風通しのよい日陰につるしておきます(第5図)。

コラム オニオンセット栽培

最近、8月末に小さな子球を植え付け、年内に収穫できるオニオンセット栽培が、家庭菜園でも行われるようになりました。子球とは、3月にタネをまいて直径2cm程度の小さな球に肥大させたもので、これを8月に植え付けます。植え付け時期が8月末までだと、年内に新タマネギが収穫できます。比較的簡単なので、ぜひお試しください。

初心者にはおすすめ。子球から育てる「ホームたまねぎ」。

直径2cmの子球を植え付ける。



収穫後は雨などが当たらない屋外に置き、風で乾かす。